

## 1. はじめに 問題の所在

近年、過疎化、少子高齢化、平成の市町村大合併、格差社会の問題等々、地域をめぐる様々な問題が噴出している。地域における伝統的な民俗行事も、これらに呼応するかのごとく、様々な変化を余儀なくされる状況がおこっている。しかし、このような状況は、今に始まったことではなく、身近なところでは、1960年代の高度経済成長期以降、そして1980年代にはじまる高度情報化社会へ向けて、社会経済構造が大きく変化するなかですでおこっていた。

例えば、民俗文化関係についてみると、昭和29(1954)年の文化財保護法(昭和25(1950)年に制定)改正により、無形文化財、重要民俗資料指定制度のなかに取り上げられ、消滅の危機にあったさまざまな民俗芸能、技術の伝承者が無形文化財保持者として指定対象となった。山口県内でも昭和40(1965)年に文化財保護条例が制定され、昭和32(1957)年から昭和35(1960)年に旧保存顕彰規定であった民俗芸能伝承者、保存会が、昭和42(1967)年から43(1968)年にかけて県無形文化財として島田人形浄瑠璃他15件が指定され、さらに昭和48(1973)年から49(1974)年にかけて6件が指定された。

さらには、昭和50(1975)年の文化財保護法「改正法」により、旧法上の運用上、無形文化財と民俗資料のいずれにも属するものとして取り扱われてきた民俗芸能を民俗文化財に属するものとして、保護整備が強化された。これに基づき、県内では、昭和51(1976)年に旧来の無形文化財を無形民俗文化財として指定、県指定は27件を数えることとなった。以後、県指定は昭和52(1977)年1件、昭和56(1981)年1件、昭和61(1986)年1件、平成3(1991)年2件、平成12(2000)年1件が指定され、現在、山口県内の県指定無形民俗文化財は33件(外に国指定3件)を数える。<sup>(1)</sup>そして、これらのいくつかは、昭和46(1971)年から49(1974)年にかけて「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」として指定を受け、積極的な調査が実施されている。恐らくは、この時期に何らかの保護措置をおこなわないと、これらの無形民俗文化財の維持継承が難しくなっているとの行政的な判断で、無形民俗文化財の保護がはかられたであろうことは、その顕著な表れの一つである。

その背景には、「口承」や「身体承」による、地域内部における上の世代から下の世代へ、「民俗」を伝達継承(伝承)していくような意識的あるいは無意識的な伝達システム、いわば地域型の伝達システム、が機能しなくなりつつある現状があったのかもしれない。「口承」や「身体承」のように直接人を媒体として情報を得ていたものから、TV・新聞・雑誌・本等のテキスト・映像を主とした情報発信媒体を経由し、多くの様々な情報が入るようになってきた。それは現在のインターネット、携帯電話メール、ワンセグ等の高度情報化が急進展するなかで、その傾向にますます拍車がかかるようになった。

例えば、節分の日にその年の恵方に向けて巻き寿司を食べる「恵方巻き」の習俗は、関西地方の習俗であったものが、大手流通業界の戦略によって、コンビニエンスストアを経由し、各地に浸透していった事例を見ても、従来の地域型の伝承経路とは異なる形で、新しい伝達経路を介して、民俗が形

成されている。<sup>(2)</sup>

このような今までとは異なる、多様化する情報伝達システムのなかで、地域の民俗事象が現代社会のなかでどのようにおこなわれ、伝承されているのか。現在伝承としての民俗行事を例に考えてみたい。

## 2. 現在おこなわれる北浦地方の虫送りの諸相

本稿で事例として取り上げるのは、長門市・日置町・油谷町（平成 17（2005）年の市町村合併により長門市となる。）および豊北町・豊浦町（同じく、下関市となる。）の 1 市 4 町（現在 2 市間）において実施される虫送り行事である。

この行事は、この地域では、広くサバア送り（サネモリ送りともよばれることもある）、サバ追いと呼ばれるが、単にサバアサマ、サネモリサマ、もっと簡略しサバア、サバガミともよばれる。

長門市から豊浦町まで、その行程約 53 km を、二体の藁馬に各々紙の冑と刀を身にまとった武者姿の藁人形を乗せ、これを見つけたものが、ムラ境や辻等の境界に次々と送っていく虫送りの行事である。この虫送り行事が実施される長門市から豊浦郡にかけての地域は、響灘、日本海に面し、通称北浦地方といわれる地方に属す。藩政期には萩本藩が管理する前大津宰判、先大津宰判および萩本藩の支藩である豊浦藩といった広範域において実施される。前大津宰判内で、この行事に関係するのは、大津郡旧深川村【旧長門市】。先大津宰判内では、大津郡旧日置村【旧日置町】・大津郡旧菱海村【旧油谷町】・豊浦郡旧阿川村・旧滝部村・旧神田下村【以上旧豊北町】。豊浦藩内においては、豊浦郡旧栗野村・旧神玉村【以上旧豊北町】・豊浦郡旧宇賀村【旧豊浦町】にあたる。<sup>(3)</sup>

この藁人形の 1 体がサバアサマ、もう 1 体をサネモリサマといい、前述のこの行事の地域名であるサバアサマは、この人形に由来する。また、「サバア」というのは、この地域で「ウンカ」<sup>(4)</sup>そのものを指す言葉である。西日本地域は藩政期には、ウンカによる凶作を契機としておこった享保の飢饉（享保 17（1732）年）の影響を受け、多くの犠牲者が出た。<sup>(5)</sup> 安永 9 年（1780 年）『諸事小々控』には、

「二十二 虫枯年廻二付諸郡において御祈禱之事

一 安永十丑年、享保之虫枯五拾年相当候付、諸郡宰判別一社宛御祈禱被仰付、尚一寺宛法事被仰付候様、三十三年二相当候節も仏事被仰付候由（略）」

という記録があり<sup>(6)</sup>、具体的にどのようなことがおこなわれたのかはわからないが、享保飢饉から 50 年を迎え、寺社に対して祈禱をおこなうよう指示し、積極的に害虫を忌避しようとしている。また 33 年目にも実施しており、この被害に対する恐怖の甚大さを物語ると同時に、死者供養の最後の吊り上げである年忌に対応する形でおこなわれている点は、注意される。

また、江戸時代末期に編纂された地誌類である『防長風土注進案』<sup>(7)</sup>には、防長二国の各地における虫送り行事の諸相が見られる。<sup>(8)</sup> 上記の影響との関わりは、現段階では判然としないが、前大津宰判大津郡深河村の項には、「氏神社へ村中集會五月蠅（サバイ）送りと申、藁にて人形馬形各々ニツを造り紙の甲冑を着せ紙の旗を建、社人祈祷の後貝太鼓にてはやし先大津の西の海へ流す」と記載され、現在の虫送り行事の姿とほぼ同じ形式でおこなわれていたであろうことがわかる。

このような民俗行事が、現在、どのような形で地域の人々が関わり、実施されているか、そこでどのような変化・変容がおこなわれているかを、平成 12 (2000) 年～平成 18 (2006) 年の隔年ごとのサバア送りの実態を通して試みる。<sup>(9)</sup> 特にルートについては、今までその全貌についての報告がなかったので、ここで報告するとともに、現段階で確認できたルート上におこなわれる儀礼を中心に、時系列において考えてみることにする。なお、以下の事例では平成の市町村合併平成 17 (2004) 年以前の旧市町名を使用していることをお断りしておく。

### 事例 1 サバア送りの人形作り (長門市深川 飯山八幡宮) (写真 1)

サバアサマの人形は、出立ち (サバア送りの実施日) の一週間前より長門市飯山八幡宮社務所において、神社氏子地域のうち、<sup>ふんじゅう</sup>藤中地区の人によって作られる。昔は、サバア送りをおこなう (「オクリダシ」という表現がとられる。) トウヤ (当番) の地区が作っていた。

現在のトウヤ地区は、飯山八幡宮の氏子域である上郷、藤中、中山、江良の計 4 地区のものがおこなう。飯山八幡宮所蔵の「明治八年ヨリ 虫送引受順番 飯山宮 社務所」(以下「虫送引受順番」と記す。)<sup>(10)</sup> によれば、明治 8 (1875) 年には正明市→江良村→下江良村 (明治 40 年 (1907 年) 下郷村に記載変更) →上江良村 (明治 41 (1908) 年下郷村に記載変更) →藤中村→仲山村の 6 地区において毎年輪番でおこなわれていた。そして、昭和 6 (1931) 年に下郷村が当番でおこなうところを正明市に変わり、以後下郷村の参加がなくなる。また昭和 41 (1966) 年に正明市からはじまるところで、正明市がはずれ、以後上郷→藤中→中山→江良の順序でおこなわれるようになり、現在まで続いている。

しかし、1980 年代頃から各地区で藁人形、藁馬を作る人がいなくなり、神社が鎮座する東深川村藤中の人がおこなうようになったといわれる。藁の騎馬人形作りにあたっては、二手に分かれ、藁馬を作るもの、藁人形をつくるものにわかれる。藁馬をつくるものは、馬の足、胴体、頭になる部分にわかれて各々作る。人形は一人の手により頭部分より作りはじめ、胴体部分を作り、それに手足をつけるようにつくる。熟練者がその担当になるようである。各々出来上がったものを最後に合体させて完成となる。なお、詳細な作成方法については、別稿で紹介したい。

完成した騎馬人形の顔部分に白半紙を貼りつけ、宮司が筆をつかい、目、鼻、口を墨書する。頭には紙でつくったカブト (折り紙でつくる兜の大きなもの) をつける。羽織の代わりに○に一文字を書いた紙を背につける。腰には木の刀をさす。人形づくりが終ると、行事当日まで、神社神殿に置いておく。

出発する 3 日前より飯山八幡宮宮司の手により、虫祈禱の神事がおこなわれる。神事当日にはオゴク (宮司宅で炊いた白飯) をつける。

サバアサマとサネモリサマは同じ作りで、違いはなく、どちらがサバアサマでサネモリサマだという認識は、作成する側にはない。サバアサマはカミサマで、サネモリサマはお供だという。

共通な認識としては、サバアというのはウンカのことを指し、サバアサマは稲につく害虫を他所に持っていつてくれるものであり、その年、田が豊作になるよう祈願するためにこの行事がおこなわれることだといわれる。

## 事例2 サバアサマの出立ちの祭日と儀礼（長門市東深川藤中 飯山八幡宮）

田植がすんだ7月上旬の日を、飯山八幡宮宮司とその年のトウヤ（担当となる当番地区）との間での話し合いにより日が選ばれる。昔は6月下旬におこなわれていたといわれる。近年では土日祭日が選ばれる。しかし、田植えが早くなったが、サバア送りの日程は変化していないともいわれる。

「虫送引受順番」には、祭日についての記載が一部しかないので、全体の様相は不明だが、明治31（1898）年～明治40（1908）年にかけては、「五月四、十三、十五、二十、二十六日」の記載があり、特定日ではないが、5月中に実施されていたことがわかる。明治41（1909）年には6月1日に実施されるものの、明治42（1910）年から昭和7（1932）年にかけては、ほぼ6月後半「二十、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九日」におこなわれ、明治41（1909）年～明治42（1910）年にかけて旧暦から新暦への移行がなされたことがわかる。ただ、この時期にも特定の日ということはない。昭和8（1933）年以降はだいたい7月上旬「一、二、三、五、六、七、八日」（昭和37（1962）年は執行されず。）となっているが、昭和40（1965）年代以降は6月後半「二十四、二十七、二十八、二十九、三十日」～7月初旬「一、三、四五日」等を実施され、祭日が平日より土、日曜日に実施しておこなわれる場合が多くなる。ちなみに昭和41（1966）年～平成11（1999）年までに実施された33回のうち、土、日に実施されたのは、22回。平成7（1995）年以降は、土、日曜日に実施されている。

平成12（2000）年～平成18（2006）年に関しては、表-1のように日時がほぼ一定していることがわかる。

午前中にトウヤ地区の人々が各々神社に集まり、神事がおこなわれる。宮司からサバアサマの行事に関する由来等の話がおこなわれ、神事が済むと、地域の人が各々鉦・太鼓・幟3本（墨書 一、定禁圧之法 一、為弘禽獸昆虫之災 一、天津祝詞乃太祝詞言）を持ち、行列を組み神社を出る。別段誰が何を持つかは、決っていない。（写真-2）昭和40（1965）年代初めまでは、ホラ貝が使用されていたという。神社を出ると、軽トラックの荷台に載せて移動する。（神官他、他の人は乗用車・軽トラックに分乗して移動）現在は国道沿を移動するが、昔は旧道を歩いて通っていた。

## 事例3 サバアサマのお立寄り（長門市西深川境川）

長門市境川において途中2件の家に立ち寄り、そこで神官よりオゴクが配られる。一軒は毎年決っているM家（境川）、もう一軒は輪番でおこなっている床地区（15軒）のうちの一軒の家にオゴクを持っていく。いずれも連絡なしに、急にサバアサマが来るので、家の者は、驚かれる。「サバアサマが来ましたので。」と神官が伝え、「ありがとうございます」と玄関口（道）で家の者（男女関係ない）が受け取る。（写真-3）

家の者は、そのオゴクをいただき、家の神棚に供え、その後ご飯とともに一緒にいただくという。何故家に来られるかについての由来等は現時点では確認できなかった。しかし、家の人によれば、昔からおこなっているからそれを続けるだけだという。昔は、鉦がなったら、サバアが来るのがわかったといい、近所の人達が7～8人集まって来ていたという。そこで、皆でオゴクを分けて食べていたという。カミサマだからご無礼があつたらいけないといわれる。オゴクをいただくと病気（夏かぜ）にならないという。

#### 事例4 長門市・日置町の境（日置町日置上長崎）

境近く黄波戸浄化センター前にトラックを止め、そこから列を作り、鉦・太鼓を叩き歩き出す。日置町の境のところに置き（写真－4）、そのまま神社に帰り、直会がおこなわれる。

その後、日置町の人によって運ばれることになるので、持ってきた長門市（飯山八幡宮氏子）の人は、いつ、どこに、誰が運ぶのかは知らない。ただ「油谷の伊上と豊北の栗野の間（ホコサキ【鉾崎】というところ）に置いておく」という話や、「昔は伊上（油谷町）のところで燃やしていた。」という話が聞かれる。

以下、各町域での実際のおこなわれ方、各地でのサバア送りに関する伝承について、みてみることにする。

#### 事例5 日置町域でのサバア送り

確認できたのは、四ヶ所（黄波戸・古市・一円・河原）。現在では、自治会長の世話のもと軽トラックで運ばれるようになってきているという。昔は中学生が運んでいたという。

ながさこ まわど  
長崎⇒黄波戸

平成12（2000）年には自治会長（当時50歳代）は次にどこに運ぶかわからず、長老に相談し黄波戸に運ぶ。長老（当時70歳代）によれば、サバアサマは夜こっそり運ぶものだというが、実際には昼14時頃に運ばれる。平成14（2002）年～平成16（2004）年には移動の方法を確認することはできなかったが、平成18（2006）年調査時には、長崎から黄波戸までは、サバアサマが町境についたらすぐに軽トラックに積み込み、日置八幡宮御神霊隆居旧跡の石塔前の四辻（黄波戸簡易水道浄水場）に置き、子ども会の参加のもと徒歩で行列を組んで、大津醤油場の三叉路まで運ぶ。男子が人形を女子が幟を持って運ぶ（写真－5）鉦・太鼓を叩いて運ぶことはなかった。子ども達は、大津醤油場の三叉路でお菓子をもらい解散した。その後人形は軽トラックで黄波戸口まで運ばれる。

##### 黄波戸口⇒古市（古市新町）

黄波戸口から郵便局そばの墓（六叉路）に運ばれる。平成12（2000）年には黄波戸の自治会長が、次の古市の自治会長に運んできたことを知らせる方法が取られ、自治会長から自治会長へ運ばれていた。昔は黄波戸口から古市までは、その間に2ヶ所（個人宅前）に運んでいたが、10年以上前（調査当時より、1980年～1990年代頃）より勝手に持ってこられるのは、迷惑だからといわれ、省くようになったとの話も聞かれる。古市に置いたら自治会長に知らせるといふ。平成14（2002）年・平成16（2004）年とも自治会長が運んだといわれる。（ただ、実際に運んだところは確認できず。）

なお、平成18（2006）年には黄波戸口の子ども会小学生男5人・女2人、男が幟・人形を女2人・男2人により郵便局そばの墓（六叉路）へ運ばれた。（写真－6）

##### 長門古市⇒一円

長門古市では、サバアサマは害虫をつけるため、しばらく置いておくものだという人と、サバアサマは害虫をつけているので、すぐに運ばないといけないという人の話が聞かれる。F氏（T15年生）によれば、昔は子どもの行事であったが、子どもが少なくなったので、自治会長が世話人となり、運ぶようになった。子ども行事の頃は1体の人形を前、後ろ2人の子どもで担ぎ、幟3本を各々1名ずつ

つ持って、1名他に太鼓を叩くものがいてはこんでいた。そのため、夏休み期間中になるように、古市にしばらくの間留めて置くこともあった。古市には自治会に伝承部があり、伝承部の人が運んでいる。特に平成12(2000)年にTV局の取材があったが、運ぶところを見られてはいけなないので、TV局がいなくなってから運んだという。それ以前は紋付・袴の大人が運んでいたという話しも聞かれる。

#### 一円⇒川原(日置町油谷町境)

サバアサマは、それを置かれた土地のもの(土地所有者)が運ぶものという。毎年来たらすぐ運ぶという。

#### 事例6 油谷町域でのサバア送り

油谷町域に入ると15ヶ所の地点におかれ、その位置もだいたい決まっている。短いところでは300mの移動、長いところでも800m、だいたい500m間隔で運ばれる。

昔から子どもが運ぶといわれるが、子どもが少なくなったので大人が運ぶという。

#### 川原⇒久富井堀

日置町から油谷町域に入るところであるが、何かしらの儀礼があるわけではなく、ただ運ばれる。話者の父世代では1~2日置いてサバアサマに「虫」をつかせ、伊上で神事をして流していたという。専業農家の人は、この行事に関心があるだろうが、専業農家も少なくなり、1人で運ぶという。平成14(2002)年には女性3名で運ぶ。

昔は、子どもが次の場所まで運ぶという。運ぶ時は話をしながら持っていき、置いて帰る時には静かにとっぴらかして(放置して)帰るといふ。これはサバアサマが置いて帰ることに気付くからだといわれる。

#### 久富井堀⇒久富荒人⇒久富長久⇒久富稲石

平成12(2000)年にはリアカーで昼間運んだとの報告がある。TVを見て、人が運ぶのをこの時始めてみたという人もいる。

平成14(2002)年には、サバアサマが運ばれると同時期に、一方で久富で神輿をトラックに載せて太鼓を叩いて地区内を巡る田頭神事がおこなわれる。(写真-7)

平成18(2006)年に確認されたのは、小学生4~6年によって長久から稲石に運ばれるところであった。幟は男1人・女2人、人形は男3人・女2人で肩に担いで運んだ。

サバアサマを運ぶと御利益がある。人に見られるのは別段構わないが、長く置いて置くと良くないといわれる。サバアサマが来ると季節が終わったような感じがしてホットするという。嫌なものだけど来て貰わないと困る。

#### 稲石⇒人丸⇒新別名⇒大坊

昔は子どもが運んでいたが、子どもが少なくなったので大人が運ぶ。気がついたものが車に乗せて運ぶ。

[新別名]人丸八幡宮・長安寺付近の旧道通りのいいとも会館(公共施設)に置いていたが、平成18(2006)年は新別名自治会のゴミステーション前におかれるようになる。このあたりに来ると雨

にもたたれ、幟はほとんど用をなさない状況となる。

〔大坊〕大坊公会堂（地蔵・庚申 大坊自治会ゴミステーションがある）のところに置かれるが、昔は庚申様があったところだといわれる。

#### 大坊⇒札幌⇒河原浦⇒大江⇒浅井⇒伊上浦⇒上り野⇒綾古

〔大坊〕平成 18（2006）年には大坊公会堂からは子ども会で運ぶ。幟は男 3 人、人形は男 3 人・女 1 人で肩に担いで運んだ。子どもによる移動がおこなわれる。

〔札幌〕庚申・地蔵がある三叉路。昔は子どもが運んでいたが、現在は、子ども会が運んでいる。平成 18（2006）年には札幌から河原浦に運ぶ際、雨が降り、子ども会が運べないというので、軽トラック（バン）で大江まで大人が運ぶ。

平成 18（2006）年菱海中の生徒が先生と一緒に寺に移動させるが、寺よりもとの場所に戻すよう指示して、元の場所に戻す。

〔河原浦〕・〔大江〕・〔浅井〕いずれも子ども会で運ぶ。札幌から大江の和（農業碑）まで運ぶ。人形、子ども会の親世代（昭和 30（1955）年代後半～40（1965）年代生）の時分には、自分らが運んでいた。その時と変わらないが、変わったといえば、子どもの数が減ったことだという。昔は楽しみにしていたが、今の子ども達がどう思っているかは、よくわからない。お菓子がもらえるので、喜んで参加する子もいるでしょう。

平成 12（2000）年～平成 18（2006）年河原浦から大江からの移動には、子ども会が参加して実施している。（写真－8）平成 18（2006）年には女 13 名・男 6 名札幌の子どもも一緒になって大人数でおこなった。大江から浅井の移動は大人 3 人・子ども 3 人（女 2・男 1）で運ぶ。浅井・尾崎自治会のゴミステーションまで運ばれる。

〔伊上浦〕平成 18（2006）年大江から伊上浦に運ぶときにダンボールに「さばあ様送ろ、さねもみ様お供よ」と書き、唱えながら送る方法が取られる。次のところまでは、唱え言（歌）を歌いながら歩いていく。

昔祠があったところに置かれ、そこから出発する。伊上浦よりは子ども 10（男 5・女 5 男 2 人幟・男 3 人人形・女 5 人人形）のもと同じようにおこなわれる。伊上小学校まで運ばれる。伊上小学校からは男 4 人・女 3 人・大人 3 で運ぶ。そこで駅周辺のゴミ掃除をおこなう。

#### 綾古⇒貝川⇒豊北町栗野

昔は子どもが運んでいたが、現在は、子ども会が運んでいる。子どもがいなくなったので、上り野の子ども会の保護者が軽トラックに載せて運んでいる。

### 事例 7 豊北町域と豊浦町域のサバア送り

豊北町域に入ると、山側（豊北町の中心部滝部を通過して国道 191 号線に出るルート）と海側（国道 191 号線を通るルート）のどちらかのルートがとられる。油谷町側から運んだ人の判断により、その年のルートが決定される。（写真－9）

昔は滝部を通過していたのだが、最近になって阿川を通るようになったという話もある一方で、阿川の方にも昔から来ていたという話も聞かれる。また、サバアサマの出発地についても、阿川ルート

上の（阿川安崎）地域では、サバアサマが、どこからやって来るかについては、長門飯山八幡宮以外に仙崎青海島（大比日神社？）・大寧寺からサバアを送り出すとの様々な伝承があり、個人的な慣習としての受容がみられる。

実際、「自分らの小さい頃には、サバアサマは何かよくわからない怖いものだった。サバアサマが来たら自分の嫌いな人の家へ持って行く。そうするとその家の人が不幸になるといわれていた。その家の人はサバアサマに気がついて、人に知られないように、こっそりと次の場所にする（運ぶ）と、その家は幸福になる。だからサバアサマのことを人に話してはいけない。」という話も聞かれ、個人によって運ばれるためか、決まった場所に置かれるという伝承はない。しかしながら、実際の行動としては、図-1のようにほぼ同じ場所に置かれていることがわかる。ただ、上記のように豊北町内では、「人に見られたり、話したりしてはいけない。」という禁忌があるためか、そのままち果てる年もあり、誰がどのように運ぶのかについては、現在でも不明な部分が多い。実際、この期間でも運ぶことを実見できたのは、平成14（2002）年豊北町のJA神玉支店から宇賀本郷集会所まで、JA職員によりトラックで運ばれたときである。それ以外は、置き場所が確認できたのみである。

豊浦町域では、宇賀本郷地区の人がおこなう。以前は宇賀地区だけでの虫送りがおこなわれていたという。『豊浦町史三 民俗編』によれば、「竹と藁で作った武者人形を乗せたものを田の間に置く。後にこれを犬鳴海岸に運んで「からへいけ、からへいけ」といって海に流した。」とあり、室津においても「笹竹に御幣をつけ、太鼓を叩きながら、「さばいろーにゃあ おかんはんせい さねもりさんにゃあ おんともよ。」と唱えながら、沖田→畑田→端の前→新田を巡り、最後に姥瀬の浜に行つて笹竹を流す。」行事がおこなわれており、地区地区でおこなわれていた行事という印象がある。

宇賀本郷のN氏がサバアを見つけて、犬鳴峠からサバアを捨てる役を長年おこなっているという。しかし、平成12（2000）年TV局の取材が入った際に、人にわからないように流すという禁忌（タブー）を破ったため、地域の人から海に流す方法が問題となり、また翌年地域内で不幸なことが色々おこったために、平成14（2002）年には、福德稻荷神社（豊浦町宇賀）宮司が神事をした後に海に流した。

平成12（2000）年・平成14（2002）年には、豊北町域で確認されたように栗野・阿川・肥中・神玉の4箇所を通り、豊浦町宇賀本郷（集会所前）と豊浦犬鳴と通る。そして最後に海に流される。その際には、「からへいけ」と唱えるとの記載が『豊北町史』にもあるが、実際には少し人形をきれいに整えて、静かに手を合わせて、海岸より投げ出して、行事は終わる。（写真-10）

しかし、このようなサバア送りにも様々な変化が認められるようになる。

#### 事例8 サバア送りの変化

平成12（2000）年～平成18（2006）年の間に、豊浦町域まで行ったことが確認できたのは、平成12（2000）年・平成14（2002）年のみで、それ以外は不明となる。平成14（2002）年調査時には、豊北神玉支所JAから資料館にサバアサマが来たとの連絡が入った。しかし、職員の人は今までで見たことがなく、資料館が調査用に添付していた連絡表を見られて、処理に困り連絡された。資料館としては、これがどこに伝わるからという情報は、「それを見た人の判断で動かされます。」と事態の変化を窺った。結局他のJAに連絡し、軽トラックで宇賀本郷にある自治会まで運ばれた。平成16（2004）



年には、サバア様をみた滝部直子の人が二見の警察署に届けて処理をどうするか確認した。警察が来るとお札（護符）のようなものがあるので、自分で処理するのはどうかと思い、一旦署に戻って情報を得て、サバア様だからということがわかり、田に人に見られないように捨てればよいということをお教えをもらい、宇賀大河内（豊浦町）に捨てにいった。

平成 18（2006）年には阿川ルートを通ることとなったが、豊北町阿川大浦地区で忽然と姿を消した。阿川大浦で実際に最後の処置をおこなった方に確認を取ると、他所に持っていくと去年のように問題がおこったら困るので、自分で処理することにされた。最後に海に流すことだけは、知っていたということで、近くの海から流された。阿川大浦では過去平成 11（1999）年にもそのまま放置されて腐敗し土に帰った例もある。また平成 17（2005）年には、油谷町から栗野に運ばれて来たが、不法投棄だという苦情が出たために、油谷町環境衛生部の方が回収にきたとの話もある。

以上、この間におこなわれたサバア送りについて各地での対応状況をみてきた。

### 3. 現在伝承としてのサバア送りから見える民俗的思考

このように現在おこなわれる事例から、どのような民俗的思考が見出されるのであろうか。まず、サバアサマが置かれる場所をルート上に着目すると、長門市から油谷町にかけては、表-1に見られるように三叉路（7）・四辻（3）・庚申祠（3）・地藏（2）・墓（1）といった、民俗世界のなかではムラとムラの境界、この世とあの世の境界、魔がひそむといった庚申塚や墓、辻等の空間に置かれる場合が多いことに気づく。何故その場所に置くのかということについての由来については確認できなかったものの、「昔から置いているから。」という理由で置かれ、ほとんど場所の移動がない。注意されるのは、上記以外に学校（2）、公会堂（1）、ゴミステーション（3）という公共施設が選ばれる点である。地域の子ども会行事として存続している点を考えれば、当然そのような場所が選ばれるのであろうが、一方では学校の怪談に代表されるように、学校そのものが、異界との関わりがあることと関係があるかもしれない。<sup>(iii)</sup> ゴミステーションについては、いつからゴミステーションを置くようになったのかは、現段階では判然としないが、置いている場所がそのままゴミステーションになったような感がある。しかし、夏時期ほぼ1ヶ月近く長期に約53kmを移動する藁馬人形は、風雨にさらされ、原型をとどめないボロボロの状態となり、見る人にとっては、その姿はまさに汚く、怪しい気味の悪いものであるのに違いない。そのためにゴミステーションが選ばれるのは、現代人の感覚では当然であるかもしれない。

豊北町・豊浦町域に入ると、一定の場所に置かれるというわけでないが、三叉路（1）、庚申塔（1）、学校（1）、JA（1）に置かれる例が確認され、同じような傾向が見られる。しかしながら、事例8の変化に見られるように、置く場所はもちろんのこと、行事そのものの存在さえも知らない人が増え、不法投棄や不審物として行政の環境衛生、警察や資料館（いずれも公共機関）にその措置を依頼するといった変化がおこっている。

その背景の一つには、生業の変化にともない、かつてサバア送りという「虫送り」行事が、本来有していた害虫防除（予防）のためという呪術的行為としての機能を、現在社会のなかで意味を求め

ることが難しくなっていることが考えられる。また、1995年の地下鉄サリン事件を契機とし、マスメディア、警察等による不審物に対する警戒心が強くなったことが地域に浸透したこと、さらには地球温暖化、ゴミ焼却問題をはじめとする環境問題への関心が高まったこと等、我々を取巻く現在の社会状況が過去の伝承的民俗的思考より、より日常的な恐ろしい現実的な危機問題として生起し、このような行為が生み出されていると考えられよう。

次に、人々の関わり方に着目してみると、事例1～4のように長門市では、飯山八幡宮の氏子組織による輪番制、特定の家、地区による輪番制をとりながら、この行事を継続している単位となっている。また事例5、6のように、日置・油谷（旧大津郡）では、その方法が、少子高齢化のなかで、変化しているとはいうものの、かつてあるいは現在も子ども会行事として、地域の伝統文化を学ぶという形式のなかで外的な力のなかで存続している。このことは、その時々の実見者あるいは経験者が、後に行事そのものの指導者候補および伝承者として中心的な役割を果たすこととなる。そして、行事そのものがもつ由来に関する（「いつ、はじめたのか。」「なぜ、はじめたのか。」「なぜ、このような形式を取っているか。」等）内的部分（目に見えない部分）については、個人的思考に拠るため、不明確なまま伝承されたり、されなかったりしている。それに比して、形や場所といった外形、空間、運ぶ・置くといった行動等外的部分（目に見える部分）にかかる伝承については、たとえそれらが視覚的に変化したとしても、上の世代から下の世代への「伝承」システム、すなわち伝える人（行為主体者）と受容する側が「地域」において民俗を必然化する規制力<sup>(12)</sup>として保持され、民俗が伝承され、存続することとなる。

さらには、平成12（2000）年のようなTV等のマスメディアにおける情報の影響下のなかで「伝統的」、「奇習」という付加価値をつけられること、あるいは平成18（2006）年のように「祭・行事調査」によって再認識され、復活されるように、いわば地域外部からの力によって伝統的な民俗的慣行を維持しようとするといった「伝承」システムを活性化させる力が生起している。

しかし、豊北町や豊浦町のように、行事そのものが、個人的に関わる行事として認識される傾向が強い地域にあっては、「生まれてはじめて見た」というような人も多く存在し、事例8のようにどう処理して良いのかわからない状況が起こり、行事そのものに様々なバリエーションを有すようになる。このように主体が個人となった場合は、同じような少子高齢化の地域であっても、上の世代から下の世代への「伝承」システムが滞っている状況が生まれている。さらには、「親、子、孫」の世代が「家」という空間のなかで一緒に生活することが少なくなり、高齢者の独居生活が増えている過疎化状況は、このような民俗を保持しようとする受容者（行事を継続する人）不在という深刻な状況をも生じさせようとする。

すなわち、ある民俗事象の発地点（中心）である長門市やその周辺地域である日置・油谷町（旧大津郡）では、地域の行事として継承される「伝承」システムが外的なものとして存続している。しかし民俗事象の発地点より遠い地域である豊北・豊浦町（旧豊浦郡）にあっては、平成18年（2006年）豊北町で完結したサバア送りにみられるように「人に見られてはいけない。」「話してはいけない。」という禁忌、すなわち内的部分が伝承され、次の地域に渡すという行為自体も、難しくなってくる社会関係のなかで、本来運ぶ場所まで流されずに、自己判断のもとで「海に流す」という最後

は同じ形式（行為）によって、行事を完結させている。そのような禁忌等の内的部分や、行事そのものの存在意味が意識されないと、不審物、不法投棄となり、もはや民俗行事の継承を見出すことはできなくなっている。そこには「伝承」システムが個人的行事として継承されるため、「個人」のもつ「思い」や「記憶」が各人各様に存在し、様々な旧来の民俗的思考が現実社会のなかで対応しながら、変容を遂げている現在の状況が窺える。

#### 4. まとめと課題

今回、近年におこなわれるサバア送りの実態から、そのルートを明らかにすることができた。しかしながら、何故その場所が選ばれるのか、明確な回答は導きえなかった。「川」側や風邪をひかない等の伝承も含め、「水」との関わりも視野に入れてみていかなければならない。また「地域」に依存する傾向が強い地域と「個人」に依存する傾向が強い地域といった、その「伝承」システムの違いから、個人的思考や価値観のなかから現代社会に対応するような形で、民俗行事そのものが行事が行われる周辺部より変化していくのではないかと指摘しておきたい。

しかし、今回十分な資料がなく、これはあくまでもこの地域内だけに生じている問題であるかもしれない。今後は、その範囲や他の民俗事象との関わりでみていかなければならない。また、「風土注進案」にあるように「先大津の西の海へ流す」という、本来この行事が油谷町と豊北境である旧大津郡で完結していたものが、ある時点を境に旧豊浦郡域まで拡大化していったのではないかとということを含め、民俗文化の地域伝播との関わりから、再度考察する必要がある。

#### 【註および引用文献】

- (1) 山口県文化財データベース <http://bunkazai.ysn21.jp/> および「山口県文化財要録」
- (2) 外立ますみ「販売するモノから見る現代の年中行事考」民具研究 127号 2003年
- (3) なお、ここで使用する各旧村名は、明治22年市町村制時の名称を用い、各旧市町名は平成17年合併以前の名称を用いる。なお旧神玉村のうち旧神田下村は、先大津宰判に属する。
- (4) イネの害虫。イネの汁液を吸って増殖、悪化すると葉枯、稲倒を生じる。体長4mmと小さく、自力では秒速1m程度の移動しかできない。しかし、梅雨時に東シナ海上で発達する南西風（下層ジェット）により、1,000km以上の長距離の移動を可能にする。これに運ばれたウンカはおよそ1日から1日半程度で中国南部、台湾から九州をはじめ西日本各地へ多数飛来する。
- (5) 江戸三大飢饉（[寛永の飢饉（寛永18年1641年）・享保の飢饉（享保17年1732年）・天明の飢饉（天明3年1783年）のうち、近世西日本（中国・四国・九州）に影響を与えたのは享保の飢饉といわれる。餓死者1万2172人、飢者264万6020人といわれるが餓死者はこれより多かったといわれる。
- (6) 『毛利家文庫 31 小々控 15』山口県教育庁社会教育・文化財課 伊藤一晴氏のご教示による。
- (7) 萩藩十三代藩主、毛利敬親の代、天保11（1837）年天保の大改革の際に編纂が企画され、翌年、防長両国諸町村浦嶋の各村浦庄屋に対し、風土・地理・産業・風俗等を上申するように通達し、嘉永5（1852）年にかけて上申、編纂が行なわれた防長両国各宰判の地誌である。
- (8) 拙稿「山口県における「虫送り」行事に関する予備的考察—『防長風土注進案』にみえる「虫送り」行事」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第1号 2006年
- (9) なお、平成12年（2000年）にはTV局の中継が入り、平成18年（2006年）には山口県文化財保護課により「祭り・行事調査」がおこなわれた。
- (10) 明治8年（1875年）～平成11年（1999年（資料調査実施年））までの実施年・月日（一部）・天気・引受村（地区）の記載がある。
- (11) 常光 徹『学校の怪談—口承文芸の研究I—』2002年
- (12) 福田アジオ『日本民俗学方法序説』1984年

#### 【謝辞】

本稿の執筆にあたり、飯山八幡宮宮司上田俊成氏、山口県教育委員会社会教育・文化財保護課の伊藤一晴氏をはじめ、2000年時にはKRY山口放送、2004・2006年には、長門市教育委員会（上野美樹、河野晴生、嶋田靖代の三氏）のご協力を得、サバア送りの実態を追いかけることができました。特にみずず記念館学芸員嶋田靖代氏には本文使用の【写真6】を快く提供していただきました。

ここに記して感謝いたします。

图-1 サバ一送り順路

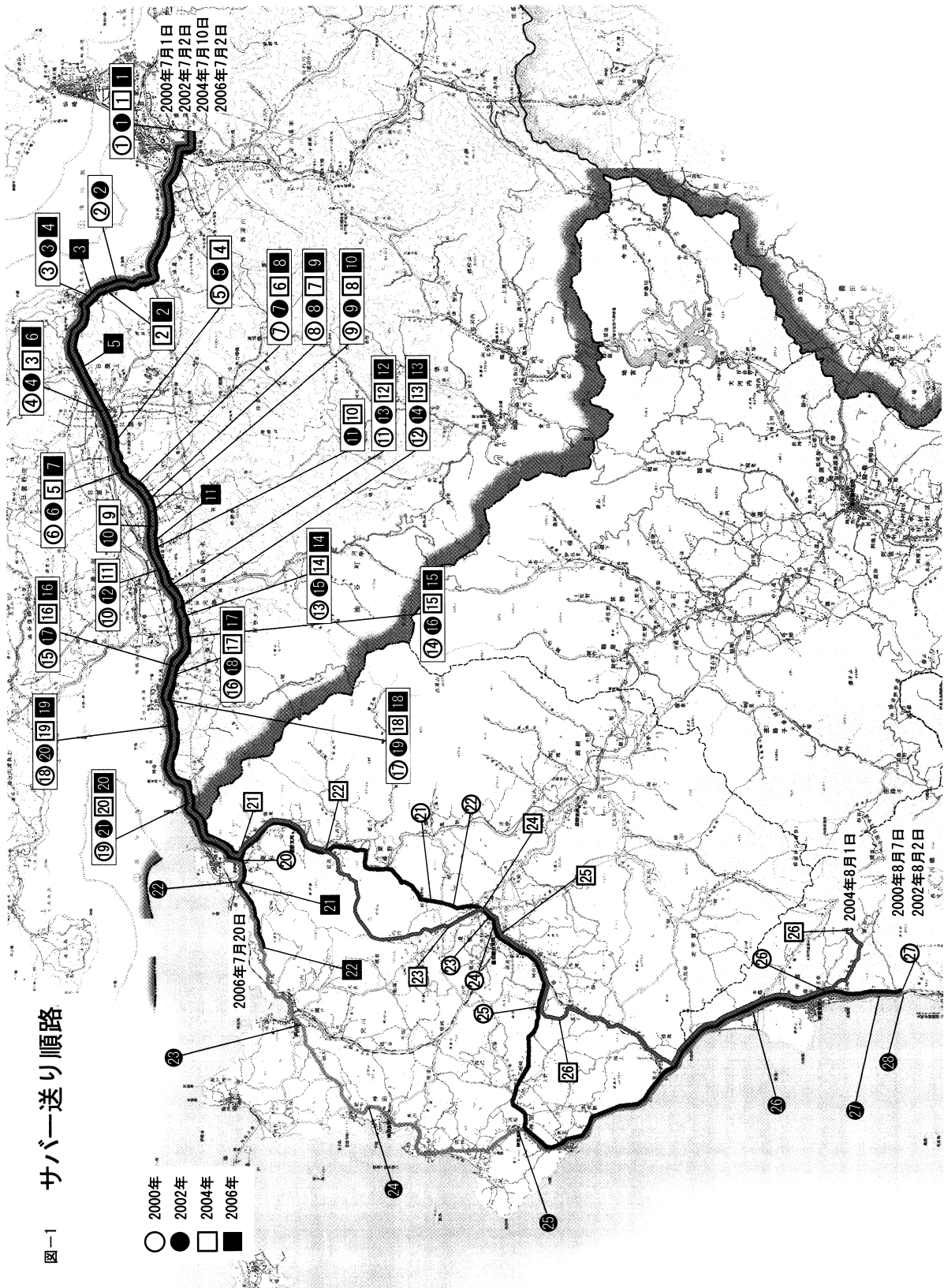


表-1 北浦地方サバー送り行事の順路一覧

2000年					
日 時	場 所	特 徴	運搬者/運搬方法	距離(km)	
1	7月1日	飯山八幡宮	神社		0
2	7月1日	長門市長崎	長門市日置町境・四辻	[5.4]	5.4
3	7月1日	日置町黄波戸	三叉路	[7.1]	1.7
4	7月1日	日置町長門古市	墓・地蔵・四辻	[10.8]	3.7
5	7月1日	日置町一円		[11.4]	0.6
6	7月2日	日置町日置下峠山(河原)	四辻	[12.5]	1.1
7	7月2日	油谷町久富荒人(井堀)	四辻 町境	[12.9]	0.4
8	7月3日	油谷町久富長久	四辻	[13.4]	0.5
9	7月4日	油谷町久富福石	油谷生活改善センター	[13.8]	0.8
10	7月6日	油谷町人丸新別名	川側	[14.9]	0.5
11	7月6日	油谷町大坊	四辻・公金堂(徳田彦大神・大師石像第30番札所)・ゴミステーション	[16.0]	1.3
12	7月9日	油谷町札場	三叉路・地蔵・庚申祠・大師石像	[16.5]	17.3
13	7月16日	油谷町河原浦	庚申	[17.2]	1.2
14	7月17日	油谷町大江	三叉路近く(和魂・農業碑)	[17.7]	0.4
15	7月18日	油谷町浅井	JRゴミステーション	[18.4]	0.8
16	7月19日	油谷町伊上浦	祠が昔あったところ	[18.7]	0.5
17	7月19日	油谷町上り野	伊上小前	[19.2]	0.7
18	7月22日	油谷町繰古	伊上駅	[20.1]	1.3
19	7月22日	油谷町貝川	集会所	[21.9]	1.8
20	7月27日	豊北町栗野	栗野川沿 三叉路	[25.2]	3.3
21	7月28日	豊北町栗野	栗野川昌泉寺前	[25.7]	0.5
22	7月31日	豊北町栗野市の瀬	オダイシ祠前・四辻	[32.0]	6.3
23	8月1日	豊北町滝部久森	念西寺・四辻	[33.5]	1.5
24	8月3-4日	豊北町滝部久森	滝部小グラウンド・三叉路	[34.2]	0.7
25	8月5日	豊北町滝部神田口	ライスセンター前 庚申様?	[37.1]	2.9
26	8月7日	豊浦町湯玉	保健所前	[52.0]	14.9
		犬鳴峠にて海に流す		[53.0]	1.0

2004年					
日 時	場 所	特 徴	運搬者/運搬方法	距離(km)	
1	7月10日	飯山八幡宮	神社		0
2	7月10日	日置町黄波戸長崎	長門市日置町境・四辻	[5.4]	5.4
3	7月13日	日置町長門古市	墓・地蔵・四辻	[10.8]	0.6
4	7月14日	日置町一円	三叉路	[11.4]	1.1
5	7月14日	日置町日置下峠山(河原)	庚申	[12.5]	0.3
6	7月14日	油谷町久富荒人(井堀)	四辻 町境	[12.8]	0.6
7	7月14-15日	油谷町久富長久	三叉路	[13.4]	0.4
8	7月15-16日	油谷町久富福石	油谷生活改善センター	[13.8]	0.4
9	7月17日	油谷町久富福石	三叉路	[14.2]	0.7
10	7月17-18日	油谷町新別名①	交差点(四辻)	[14.9]	0.5
11	7月18日	油谷町新別名②	川側	[15.4]	0.6
12	7月18日	油谷町大坊	四辻・公金堂(徳田彦大神・大師石像第30番札所)・ゴミステーション	[16.0]	0.5
13	7月19日	油谷町札場	三叉路・地蔵・庚申祠・大師石像	[16.5]	0.7
14	7月20日	油谷町河原浦	庚申	[17.2]	0.5
15	7月21日	油谷町大江	三叉路近く(和魂・農業碑)	[17.7]	0.7
16	7月22日	油谷町浅井	JRゴミステーション	[18.4]	0.3
17	7月22日	油谷町伊上浦	祠が昔あったところ	[18.7]	0.5
18	7月23日	油谷町上り野	伊上小前	[19.2]	0.9
19	7月24日	油谷町繰古	伊上駅	[20.1]	1.8
20	7月24日	油谷町貝川	貝川集会所	[21.9]	3.3
21	7月24日	豊北町栗野	栗野川三叉路	[25.2]	0.9
22	7月26日	豊北町栗野宮迫		[28.1]	8.7
23	7月27日	豊北町栗野市の瀬	オダイシ堂	[32.0]	

2002年					
日 時	場 所	特 徴	運搬者/運搬方法	距離(km)	
1	7月2日	飯山八幡宮	神社		0
2	7月2日	長門市長崎	長門市日置町境・四辻	[5.4]	5.4
3	7月3日	日置町黄波戸	三叉路	[7.1]	1.2
4	7月4日	日置町長門古市	墓・地蔵	[10.8]	5.4
5	7月5日	日置町一円	三叉路	[11.4]	0.8
6	7月6日	日置町日置下峠山(河原)	四辻	[12.5]	0.9
7	7月7日	油谷町久富荒人(井堀)	四辻	[12.9]	0.4
8	7月8日	油谷町久富長久	四辻	[13.4]	0.5
9	7月9日	油谷町久富福石	油谷生活改善センター	[13.8]	0.4
10	7月9日	油谷町久富福石	三叉路	[14.2]	0.4
11	7月10日	油谷町人丸新別名	交差点	[14.9]	0.7
12	7月11日	油谷町人丸新別名	川沿い	[15.4]	0.5
13	7月11日	油谷町大坊	四辻・公金堂(徳田彦大神・大師石像第30番札所)・ゴミステーション	[16.0]	0.6
14	7月12日	油谷町札場	三叉路・地蔵・庚申祠・大師石像	[16.5]	0.5
15	7月13-14日	油谷町河原浦	庚申	[17.2]	0.7
16	7月15-16日	油谷町大江	三叉路近く(和魂・農業碑)	[17.7]	0.5
17	7月18-19日	油谷町浅井	三叉路・ゴミステーション	[18.4]	0.7
18	7月19-20日	油谷町伊上浦	祠が昔あったところ	[18.7]	0.3
19	7月20-21日	油谷町上り野	伊上小前	[19.2]	0.5
20	7月21日	油谷町繰古	伊上駅	[20.1]	0.9
21	7月22日	油谷町貝川	貝川集会所	[21.9]	1.8
22	7月23-24日	豊北町栗野安崎	庚申・三叉路	[25.3]	3.4
23	7月25日	豊北町阿川大曲	豊北第三中・三叉路	[30.0]	4.7
24	7月25日	豊北町肥中	近くに庚申	[33.5]	3.5
25	7月30日	豊北町神玉	JA神玉支所	[38.9]	5.4
26	8月1日	豊浦町宇賀本郷	宇賀集会所	[47.2]	8.3
27	8月2日	豊浦町湯玉	青空市場・福德稲荷	[51.2]	4
28	8月2日	犬鳴峠にて海		[51.7]	0.5

2006年					
日 時	場 所	特 徴	運 搬 者	距離(km)	
1	7月2日	飯山八幡宮	神社		0
2	7月2日	日置町黄波戸長崎	浄水場・三叉路	人/車	[5.4] 5.4
3	7月2日	日置町黄波戸	四辻・川	人(自治会)/車	[6.7] 1.3
4	7月2日	日置町黄波戸	三叉路	人(子ども会)/車	[7.1] 0.4
5	7月2日	日置町黄波戸口	個人宅	人(自治会)/車	[9.2] 2.1
6	7月2日	日置町長門古市	三叉路・墓・地蔵	人(子ども会)/歩	[10.8] 1.6
7	7月2日	日置町日置下峠山(河原)	四辻	人(子ども会)/歩	[12.5] 1.7
8	7月2日	油谷町久富荒人(井堀)	四辻	人/車	[12.9] 0.4
9	7月2日	油谷町久富長久	三叉路	人/歩	[13.4] 0.5
10	7月2-3日	油谷町久富福石	油谷生活改善センター	人/歩	[13.8] 0.4
11	7月3日	油谷町人丸新別名	長安寺前・ゴミステーション	人/歩	[14.??] 1.1
12	7月4-6日	油谷町大坊	四辻・公金堂(徳田彦大神・大師石像第30番札所)・ゴミステーション	人(子ども会)/歩	[16.0] 0.5
13	7月6-8日	油谷町札場	三叉路・地蔵・庚申祠・大師石像	人(子ども会)/歩	[16.5] 0.7
14	7月8-9日	油谷町河原浦	庚申	人/車	[17.2] 0.5
15	7月9-10日	油谷町大江	三叉路近く(和魂・農業碑)	人(子ども会)/歩	[17.7] 0.7
16	7月10-11日	油谷町浅井	三叉路・ゴミステーション	人(子ども会)/歩	[18.4] 0.3
17	7月11-12日	油谷町伊上浦	個人宅前・昔祠があったところ	人(子ども会)/歩	[18.7] 0.5
18	7月12-13日	油谷町上り野	伊上小前	人(子ども会)/歩	[19.2] 0.9
19	7月13日	油谷町繰古	伊上駅前	人(子ども会)/歩	[20.1] 0.9
20	7月13日	油谷町貝川	貝川集会所前	人(子ども会)/車	[21.9] 1.8
21	7月14-17日	豊北町栗野安崎	三叉路・庚申祠	人(大人)/車	[25.3] 3.4
22	7月18-19日	豊北町阿川	三叉路・集落入口	人/車	[26.3] 1.0

サバアサマ順路写真



写真1 サバアサマ人形作り 2000年

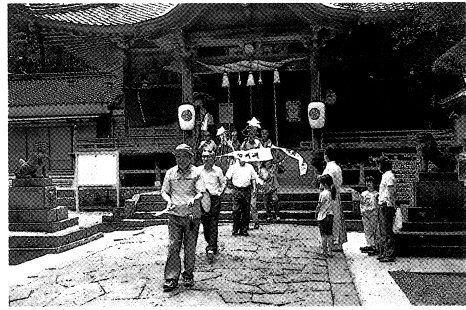


写真2 サバアサマの出立風景 2004年

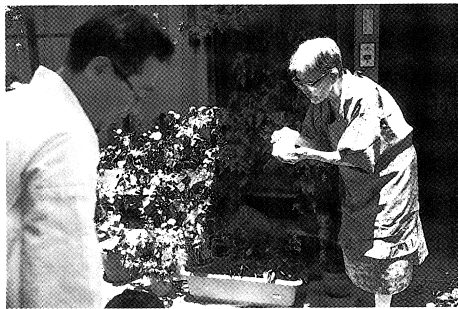


写真3 オゴクの受渡し 2000年

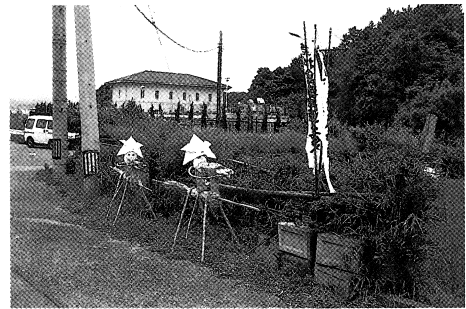


写真4 長門市・日置町境 2002年



写真5 日置町黄波戸のサバアサマ送り 2006年

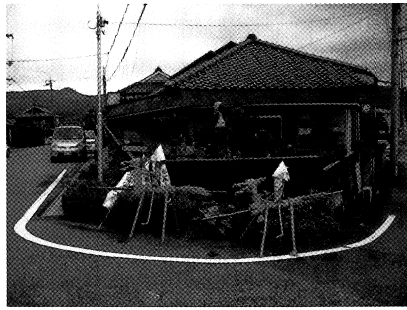


写真6 日置町長門古市のサバアサマ 2006年

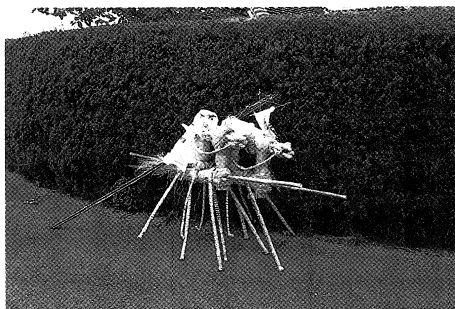


写真7 油谷町久富稲石のサバアサマ 2002年



写真8 油谷町大江のサバアサマ送り 2002年

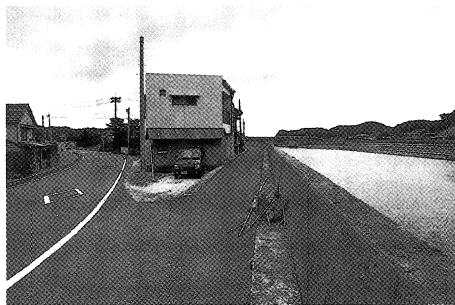


写真9 豊北町栗野のサバアサマ 2002年



写真10 豊浦町犬鳴のサバアサマ 2002年

---

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

## 研究紀要

第2号

発行年月日 2007年3月31日  
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム  
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8  
TEL 0837-88-1841・1842  
FAX 0837-88-1843  
印刷 アリフク印刷株式会社  
〒759-5101 山口県下関市豊北町栗野 4896-8  
TEL 0837-85-0311  
FAX 0837-85-0312

---